

臨海の古墳時代集落

—松崎遺跡の歴史的素描—

早野浩二

本稿では松崎遺跡における多品目に及ぶ遺物の類型的分析を基礎として、臨海に立地する古墳時代集落遺跡としての側面を照射した。結果、遺跡は塩生産のみならず、海産物の生産、生産用具の製作、軍事活動等が複合した多角的な生産活動によって支えられていたことを明らかにした。続けて遺跡が成立する過程の検討、遺物類型が類似する遺跡との比較、集団の社会位置の相対化を通じて、遺跡が一定の政治的意思に沿って、計画村落として成立した構図を提示した。その構図は、屯倉制・部民制を基礎とする領域・人身的な支配の前提でもあった。それらの制度によって支えられた生産体制は、古代における貢納経済を前提とした生産体制とは本質的に異なっていた。

はじめに

東海市大田町松崎に所在する松崎遺跡(註1)は、知多半島西岸基部、伊勢湾に面した砂堆上に立地する製塩遺跡としてつとに知られている。遺跡の調査研究の歴史は、1910年頃、名鉄常滑線敷設時に貝層が露出したことに端を発し、1976年、2004～2005年に東海市教育委員会、1988～1989年に財団法人愛知県埋蔵文化財センターによる発掘調査が実施された。

1世紀近くに及ぶ調査と研究の歴史で、最初に特筆すべき事績は、早くに杉崎章が「特殊台脚付土器」として注目した松崎遺跡と下浜田遺跡の土器を、近藤義郎が製塩土器であることを立証した両者の卓見である(杉崎1956、近藤1965)。以後、両者の分析を基礎として、立松彰が製塩土器の編年研究を展開している(立松1984・1994)。

財団法人愛知県埋蔵文化財センターの調査を受けては、森勇一による海藻に付着する珪藻から古代製塩における海藻利用をはじめて明ら

かにした研究(森1989・1991a・1991b)、渡辺誠による微小貝類・ウズマキゴカイを通じて「藻塩焼く」と万葉集に歌われたところの採鹹方法を実証した研究(渡辺1991)が大きな成果として結実した。福岡晃彦による製塩工程把握の具体的試み(福岡1991)、堀木真美子による出土人骨の形質人類学的研究(堀木1998)も、遺跡を通じた研究が多局面において展開していることを示している。

上に列記したように松崎遺跡は古代生産史研究において記念碑的事績を数多く残した反面、遺跡は製塩遺跡としての側面が強く意識されるあまり、臨海に立地する集落遺跡としての側面が副次的に扱われる傾向にあったことは否定できない事実である。そこで、本稿ではあえて土器製塩に直接関連する事象を捨象し(註2)、古墳時代の他品目に及ぶ遺物を類型的に分析することで、古墳時代集落としての全体把握を試みることとする。この試みが意図するところは、他の生産活動の実体を通覧し、労働編成の見地から古墳時代における塩生産の専門性や生産体制を逆照射すること(註3)、生産者、生

(註1) 遺跡は市指定史跡「松崎貝塚」として登録されているが、遺跡は貝塚としての側面に限定されないことから、本稿においては、愛知県埋蔵文化財センター調査報告書に従い「松崎遺跡」として呼称する。なお、最初に報告された「堀切貝塚」は、字名の誤認による名称で、近藤義郎による論説(近藤1965)以後は、「松崎貝塚」に遺跡名が改められた。

(註2) 松崎遺跡の土器製塩にかかる幾つかの知見については別稿を準備中である。

(註3) 土器製塩研究と分業にかかる理論的枠組みにおいては、農耕、農村との対置が前提とされることが多い(近藤1966など)。この前提は生産史の研究に通底するもので、「農業中心主義」の歴史学とする脇田晴子による警鐘がある(脇田1995)。石部正志や大久保徹也は、農耕への照射のみならず、交易・軍事活動を含めた他の生産活動の具体相を明らかにする必要性について説いている(石部1985、岩本・大久保1999)。

産集団の社会位置を明確にすることで生産組織の描写に向けての素地を準備することにある。こうした分業と集団編成の議論を展開しつつ、集落類型の把握に向かう問題についても一定の方向性を示したい。

1 松崎遺跡の遺物相

(1) 遺物の類型化と出土状況

調理具、供膳具としての土師器と須恵器、製塩土器以外の遺物について、用途に応じて農具、工具、漁具、武具、祭祀具、装身具、紡織具、その他として類型化した。愛知県埋蔵文化財センター調査区において、これらの遺物は、遺物包含層（第Ⅶ層；破碎貝類が混入した黒褐色細砂層）を中心に分布する（図1）。遺物包含層の成因は、居住域に形成された遺物包含層の流出によるものと考えられる。その周囲に炭化物・灰の堆積は認められず、製塩土器堆積層も形成されないことから、土器製塩は距離を隔てた地点で行われたことも指摘できる。東海市教育委員会調査区においては、竪穴住居とその付近における出土が多い。以下、特徴的な遺物の情報を列記し、それから派生する事象についても幾らか触れておく。

(2) 農具

農具として鉄製鋤鋤先の出土がある。

U字形鋤鋤先（図2-1）1点出土している。現状での平面形は両面鈍角の凹字形であるが、刃先はかなり短く、使い減りによる変形は明らかである。刃幅は14～15cmに復原される。

周辺の集落遺跡に目を転じると、U字形鋤鋤先は5世紀後半の豊田市神明遺跡に（三味線塚古墳の周溝出土例を含めて）4点の出土例がある程度で、出土状況の特異さを感じさせる。このような状況を、岩崎卓也は「日常作業とのかかわりの薄さを感じさせる」と評価し、家父長層による寡占体制が進んでいたとする解釈をも退けた（岩崎1985）。松崎遺跡におけるU字形鋤鋤先の出土は、土器製塩と農閑副業の関係性を象徴する遺物としても興味深い。上の評価を考慮するなら、U字形鋤鋤先の出土を短絡に農作業に直結させることは難しい。一方、大村直は、農具の形態変化や鋤鋤先への鉄刃装着の

割合を根拠に、岩崎の評価を消極的と評価した（大村1996）。いずれにせよ、岩崎による「田畑の耕起具というよりも、道路の整備や水路の掘り返しを含む土木用具としての意義」に対する視点をも踏まえ、開発の主体や集団組織、ひいては村落景観を論じる材料として、U字形鋤鋤先の出土を評価する必要がある。

(3) 工具

工具としては鉄製刀子が出土している。さらに刀子の装具として、鹿角製柄の出土がある。

鉄製刀子（図3-2～5）関の形状が判明する3点に加えて、茎の残欠と思われる破片数点がある。いずれも木質等の遺存については明確ではなく、装具との対応は不明である。関部の形状が判明する3点は、いずれも両関である。刀子の片関から両関への変化はTK208型式期前後とされるので（大村1996、魚津2000）、刀子の時期は5世紀後半以降に比定できるが、下限については明らかでない。海産物の調理具として使用された可能性（森1992）も考慮されるが、推測の域を脱するものではない。

鹿角製刀子柄（図3-6）刀子柄は茎の挿入に備えた孔が確認できる。表面は鉄製工具によって平滑に仕上げられている。装飾性に富む鹿角製刀子柄（図7-34）については、別立てとして詳述する。

(4) 漁具

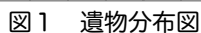
漁具は網具、釣具、刺突具、陷穽具に分類する。網具には土錘、鹿角製針（網針）、釣具には鉄製釣針、陷穽具には土師質飯蛸壺の出土があるが、明確な刺突具は出土していない。土錘は、管状・球状土錘、有溝土錘等が出土しているが、時期を判別する手段を欠くので、資料の提示と説明を割愛する。

鹿角製針（網針）（図3-7）鹿角製の網針と考えられる。鹿角を篋状に裁断し、下端を先細りに加工する。裁断した面は刀子状の工具による削痕が明瞭で、反対側の面は鹿角特有の自然面を残す。上端付近に円孔を穿孔する。長さ10.2cm、幅1.4cm、厚さ0.8cm、孔径0.3cm。

鉄製釣針（図3-8～10）鉄製釣針が4点出土している。以下の記述は、渡辺誠が提唱する鉄製釣針の分類、部位名称、測定部位（渡辺2000）に従った。いずれも“し”の字状単式

土師質飯蛸壺 (図 3-11) 土師質釣鐘形の飯蛸

整される。釣手部分は手捏ねによって、径 3 cm



前後、高さ2 cm前後の円柱状に成形し、径0.5 cm前後の紐孔を焼成前に一方向から穿孔する。浅黄橙色で、胎土中には1～2 mmの砂粒をやや多く含む。豊橋市瓜郷遺跡では、弥生時代後期の竪穴から釣鐘形飯蛸壺の紐部分が出土したとされるが、弥生時代において釣鐘形飯蛸壺は例外的である。いずれにせよ松崎遺跡例は、古墳時代における飯蛸壺分布の東限を示す例となる。

飯蛸壺の編年にかかる研究として、森浩一、西口陽一による研究がある（森1950・1963、西口1989）。西口は釣鐘形飯蛸壺を6世紀以降に編年し、森は、土師器釣鐘形の製作は須恵器釣鐘形の模倣に端を発し、身部が鐸形の形状は、内彎形の形状に後出するとした。これらを参考とすると、松崎遺跡の飯蛸壺は6世紀に編年されようか。

しかし、大阪湾沿岸域を中心に出土する釣鐘形飯蛸壺とは相違点が多い。松崎遺跡例は諸例と比較して体部が顕著に外反し、容量も大きい。さらに釣鐘形飯蛸壺の紐孔は通常、紐作りによるもので孔径も大きいのが、松崎遺跡例の紐孔は穿孔によるもので孔径が著しく小さい。個体数が1点であることにも配慮するなら、松崎遺跡例を飯蛸壺とするに疑義なしとはしないが、鐸形土製品など祭祀具としての用途も想定しがたい。いずれにせよ、類例の出現を受けて改めて検討する機会が必要であろう。なお、胎土や製作技法は知多式製塩土器に類似するので、製塩土器製作者による製作も想像されてよい。

(5) 武器（馬具）

武器として、鉄剣、鉄鏃、装飾付大刀装具の出土が知られている。鉄剣については、実見する機会に恵まれなかったため、資料の提示と説明を割愛する。また、武装を構成する道具として、馬具を武器に含めて理解する。馬具としては、鉄製鉸具の出土がある。

鉄鏃（図3-12～19）鉄鏃は8点以上出土し、遺跡出土の鉄製品では目立つ存在である。鏃身部が残存する6点については、平根系鉄鏃4点（12～15）と長頸鏃2点（16・17）に分類される。さらに鏃身部の形状から、平根系鉄鏃は腸挟柳葉式1点（12）と三角形式3点（13～15）に、長頸鏃2点は柳葉式に細別される。平根系腸挟柳葉式は5世紀後半から6世紀にか

けて平根系鉄鏃の主体となる形式であること、2点の長頸鏃は鏃身部と頸部の境界が不明瞭になりつつあること、茎部の関の形状は、直線的なもの、裾広がりにやや開くもの、棘状の突起をもつものの三者が認められることから、鉄鏃は6世紀後半を前後する時期の所産と理解するのが妥当であろう。

装飾付大刀・金銅製責金具（図3-20）大刀の外装を構成する金銅製の責金具が出土している。柄頭は遺存しないので、残念ながら大刀の形制は不明とせざるをえないが、いわゆる装飾付大刀の装具として誤りない。

断面は方形を志向する“凸”形（幅5.0 mm、中央の厚さ3.0 mm、両側縁の厚さ2.4 mm）で、金銅を平面倒卵形（外径36.6×22.8 mm、内径31.0×16.3 mm）に回して両端を鍛接する。責金具としては厚みがある。

責金具の両側縁はそれぞれ1条の沈線を介して、鑿打ちによる鋸歯状の刻み列点、いわゆる双連珠文を刻む。一方の側縁の刻みは136列を数える。連珠を刻むピッチは0.5～0.9 mmでやや精粗があるが、基準制度は渡来系の技術に
およそ準じている（勝部・鈴木1998）。大刀装具の各要素を系列的に整理した大谷晃二の研究（大谷1999）を参考とすると、金銅製双連珠文責金具は、およそTK43型式期の年代が与えられる。

鉄製鉸具（図3-21）縁金前縁の平面形をC字形とする鉸具で、刺金軸をT字形に鍛接した刺金を縁金基部に固定する。横軸も同様にして固定される。馬装を構成する鉸具とすれば、金具

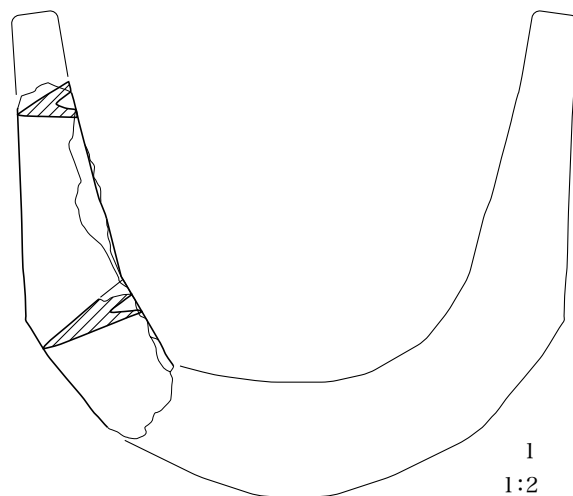


図2 農具

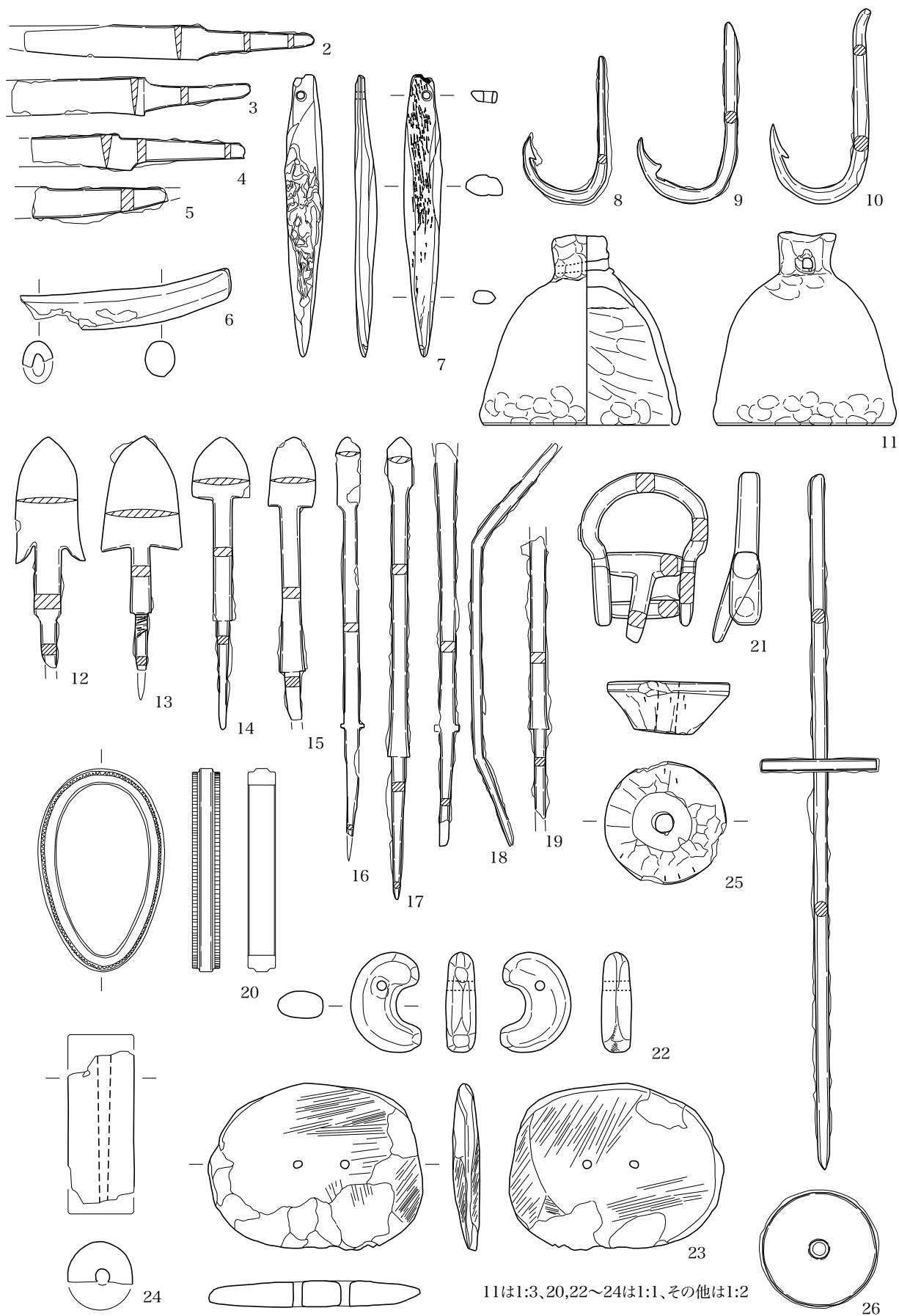


図3 工具・漁具・武器・祭祀具・装身具・紡織具 (26 は杉崎編 1984 より作成)

が全体に太く頑丈である特徴から、鐙を懸垂する鐙鞆頭である可能性が考えられる。時期の特定が困難であるが、6世紀を中心とした年代を想定しておきたい。

(6) 祭祀具

祭祀具として滑石製模造品（勾玉・有孔円板）が各1点出土している。

滑石製勾玉（図3-22）勾玉は丸みを残す精製品で、単純に模造品とするには疑問も残る。計測値は長さ1.9 cm、幅1.3 cm、厚さ0.5 cmである。孔径0.2 cmで、片面穿孔。勾玉の扁平粗製化（模造品化）は、志賀公園遺跡SU13における出土例によって松河戸Ⅱ式2段階には始まっていたことが知られるから、丸みを残す滑石製勾玉はそれ以前に帰属する可能性がある。しかし、松崎遺跡が内包する年代とは整合しないので時期の決定には慎重でありたい。

滑石製有孔円板（図3-23）長さ3.0 cm、幅3.9 cm、厚さ0.5 cmを計測する。大型であること、平面形が隅円方形に近い長楕円形であること、研磨が不十分で節理をそのままに残す部分が目立つことなど、後出的な要素が多く認められる。宇田Ⅰ式2段階（東山111号窯期）とした志賀公園遺跡SU12には楕円形を呈する有孔円板が伴出するが、それよりも明らかに粗製化が進行していることから、宇田Ⅱ式1段階（城山2号窯期）前後の年代を与えておきたい。

なお、周辺の集落遺跡における石製模造品の出土については、生産用具や武器などを共伴する事例が少なくないことから、生産・消費単位としての個別家族の自立化と深いかかわりがあったことが予見される（早野2005）。これは高橋一夫の示唆（高橋1971）を受けたものである。生産遺跡における石製模造品についても、生産組織との関係を論じる方向性を示しうるであろう。

(7) 装身具

装身具として碧玉製管玉1点（図3-24）の出土がある。濃緑色の良質な石材を選択する。残存する長さ2.7 cm、幅1.2 cm、片面穿孔。

(8) 紡織具

紡織具として陶製（須恵質）紡錘車、鉄製紡錘の出土が各1点報告されている。

陶製（須恵質）紡錘車（図3-25）無文、逆裁頭円錐形の紡錘車である。上面の径4.4 cm、下面の径2.1 cm、高さ1.9 cmで、中心孔の径0.8 cm、重量30.5 g。外面はヘラケズリによって入念に調整され、光沢がある。

鉄製紡錘（図3-26）鉄製の軸芯に鉄製の紡錘車が組み合った状態で遺存する。紡錘車の径2.2 cm、高さ0.4 cm。

万葉集には、「をとめ等が織る機の上をま櫛もちかかげ栲島波の間ゆ見ゆ（巻第七・1233）」と歌われるように、機織業と「（あま）おとめ」の関係、つまり、生産・消費単位としての個別家族と紡錘車の保有形態、機織業の機能分担との関係について興味がもたれるが（註4）、ここでは議論の方向を示すに留めたい。

(9) その他

生産用具の生産に関連する遺物としての鞆羽口、砥石、鉄滓、加工段階の骨角製品、骨角素材、さらに用途不明の骨角製品などをここに一括した。ただし、出土状況から古墳時代に限定することが困難なものが少なくない。

鞆羽口（図4-27）鞆羽口は円筒形、断面の厚さ2.7 cmで、外径が6.4 cm、内径が2.3 cm前後に復原される。図上の上位部分は黒色化し、ガラス質滓が発泡することから、先端付近の破片であることが判明する。なお、鉄滓については調査する機会に恵まれなかったが、古墳時代後期と報告されている。

砥石（図4-28）砥石は凝灰岩製のものを図示した。軟質で肌理が細かい仕上砥である。断面台形で、3面を使用する。他に仕上砥と思われる流紋岩製砥石、荒砥と思われる断面多角形の泥岩製砥石がある。

骨角器未成品・素材・用途不明骨角製品（図4-29～33）骨角製品の製作に関する遺物、用途不明骨角製品を一括した。29・30は切断痕がある鹿角素材である。29は枝角を素材としたものである。刀子柄の未製品であろうか。30はノミ状工具によって枝角を切り落とした痕跡が明瞭に残る。切り落とした枝角を素材としたのであろう。31はシカ中手骨・中足骨の遠位端で、骨鏃等の製作過程において除去

（註4）小笠原好彦が、紡錘車の出土状況と集落や共同体内部における分業の進展との関係について発言している。考古学研究会第49回総会「生業と社会」における討議（考古学研究会2003『考古学研究』第50巻第3号に掲載）による。

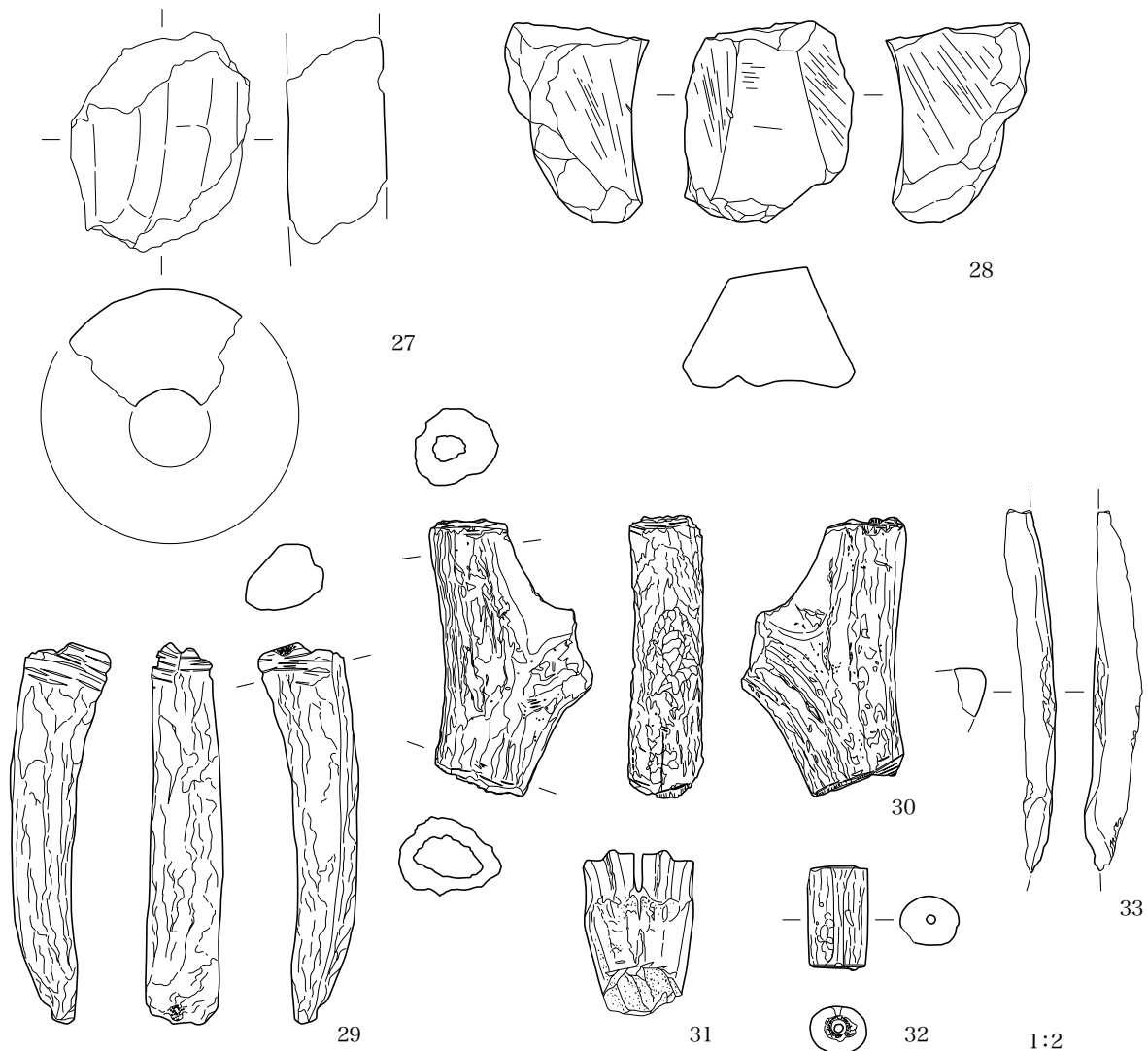


図4 その他の遺物 (31 は杉崎編 1984 より作成)

されたと考えられる。32 は用途不明の鹿角製品である。断面が楕円形で、中央に径 0.2 cm の貫通孔がある。和歌山県西庄遺跡に類例 (図 10-22) がある。33 は鹿角製品の破片で、成形による面が 2 面確認できる。

2 松崎遺跡と社会的分業

(1) 漁撈と海産物生産

松崎遺跡における網具、釣具の存在から、遺跡周辺で網漁法、釣漁法による漁撈活動が展開していたことは確実である。陷穽具 (飯蛸壺) による飯蛸漁については、飯蛸壺の形態が他にないこと、飯蛸漁に 1 個体のみの飯蛸壺の出土は不自然なことから、違和感が残る。仮に飯蛸漁が行われていたとしても、決して主要な労働

ではありえない。あるいは、飯蛸は釣漁に用いる餌として漁獲の対象とされた可能性もある。刺突具による刺突漁の有無についても、鉄鏃などの武器との弁別の問題が残るので、検討の余地がある。工具としての鉄製刀子が、貝類の調理や海藻の採取などに使用された可能性についても同様である。漁具の詳細な比較検討、動物遺存体の統計分析による対象魚の特定については別に委ねるが、漁撈の労働編成上に占める比重が無視できないものであったことは相違ない。

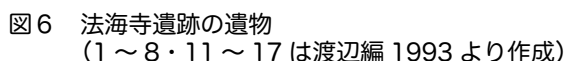
(2) 武装内容と軍事活動

松崎遺跡からは武器として、装飾付大刀 (金銅製責金具)、鉄鏃、馬具 (鉄製鉸具) が出土した。集落遺跡から出土する複数の鉄鏃については、武装に関係するという解釈も多いが (広瀬 2003 など)、建築儀礼用の祭祀具とする意

上に列記したように、鉄鏃のみを参照しても、それを武器とする解釈に拘泥する危険性が理解されるが、装飾付大刀や馬具がおよそ6世紀後半の所産と判断しても矛盾がなく、同時期の群集墳の副葬品とも共通することを重視する立場から、それらは武装を構成する遺物群であったと把握したい。製塩集団が有事に軍事活動に参加したとすれば、問題は塩生産の専門性のみにとどまらず、中央における軍備の実体にも派生することになる。

松崎遺跡における韃羽口や砥石などの鍛冶関連遺物、鹿角製刀子柄などの骨角製品や加工段階の骨角製品、骨角素材による生産関連遺物の組成は、一貫した工程に沿って工具や漁具など各種生産用具、あるいは武器などが生産された可能性を示唆する。ただし、出土遺物の年代的な根拠が希薄であるので、生産活動の具体像を叙述することは難しい。

53



3 鹿角装刀子柄について

この節では、集団の帰属や集落の質的な問題に深く関係する鹿角製刀子柄を詳細に扱い、生産集団の社会位置や交流関係を推定する素材としたい。

(1) 鹿角製刀子柄（鹿角製柄）

鹿角製刀剣装具に類似する刀子の鹿角製柄装具（図7-34）である。柄間までを一材の鹿角で製作している公算が大きいので、用語としては、「鹿角製刀子柄」あるいは単に「鹿角製柄」と呼称する。

柄は、鹿角の基部側を頭端面として製作する。柄縁側は折損し、茎を挿入する装置は認められない。頭端面は刀身の面と直交する方向に突帯を削出し、半円形の文様帯を2区画設ける。文様帯は3本の刻線によって区画され、背側の区画は内側2本、腹側の区画は外側2本の刻線間を刻み目状に彫刻する。頭端面の区画内には精巧な連続三角文の浮彫があり、赤彩が残る。連続三角文は、三角形の頂点間に他方の三角形の頂点を重ねる連接方法（多重三角文）によって構成される。外周面の左右両側面は頭端面同様、3本の刻線によって区画され、内側2本の刻線間を刻み目状に彫刻する。両側面の区画内には弧線を重ねた鱗状の図形を充填する。

柄頭端面に残る赤色顔料について、蛍光X線分析を実施した（図12）。測定機器は（株）堀場製作所のエネルギー分散型蛍光X線分析装置XGT-5000X IIを使用した。なお、定量分析はスタンダードレスのファンダメンタルパラメータ法により実施し、酸化物の合計が100%となるように規格化した。測定条件は、励起電圧：30 kV、電流：1.00 mA、計測時間：300 s、X線管球：Rh、測定雰囲気：大気中、

X線照射径：100 μ mである。測定の結果、水銀（Hg）が検出されたことから、顔料は水銀朱に特定された。

(2) 図文の系譜

文様帯は、複数の刻線に刻み目状彫刻を加えた、いわゆる多直線刻み目文（勝部・鈴木1998）によって区画される。この文様区画は小林行雄が第二類（鹿角製刀剣）装具の多くに認めた特徴である。続けて小林は、主として第一類装具と剣、第二類装具と大刀が対応するとした（小林1976b）。

鹿角製刀剣装具の多くは、その外周面の文様帯に直弧文を配置する。松崎遺跡の柄装具の文様帯区画に直弧文は使用されないが、頭端面の連続三角文と外周面の弧線は、直弧文を斜行軸と弧線に分割し、部位を違えてそれぞれに配置したものと解される。直弧文の斜行軸のみを抽出した斜行線文を分割することによって、連続三角文が出現する過程は、大刀装具において知られ（白石1999）、肥後地域を中心に展開する装飾古墳の図文構成の展開（高木1999など）とも流れを同じくする（図8）。より詳細に比較を試みるなら、松崎遺跡の連続三角文にみる三角形の連接方法は、熊本県釜尾古墳の多重三角文や熊本県永安寺東古墳にみる連続三角文の列を送る手法に類似が求められる。鹿角製刀剣装具と装飾古墳の直弧文の構図、使用法がよく合致し、両者が具象する思想的背景が共通することを強調した小林行雄の指摘（小林1946）がまず想起されるところである。これに加えて直弧文系列の図文を具えた鹿角装具と壁画系装飾古墳の展開においても共通の思想的背景が保持されたと予測することも可能かと思われる。

なお、直弧文の解体によって生じた弧線を多直線刻み目文による区画内に充填する図文は、福岡県岩戸山古墳の石鞍に類似し、それがさら

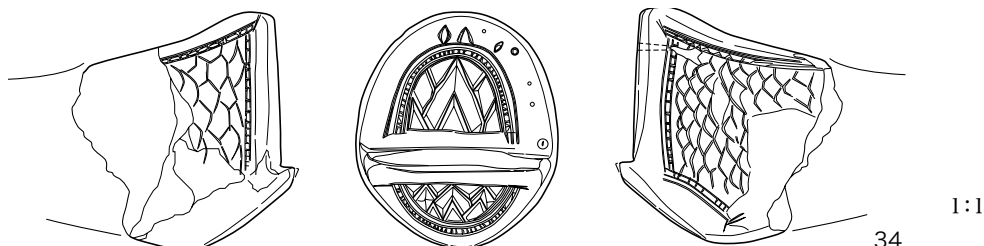


図7 鹿角製刀子柄

に形式化した図文は石見型盾形埴輪にしばしば採用されている（図8）。

柄頭端面の突帯と半円形文様区画は、和歌山県磯間岩陰遺跡の第一類剣装具に類似するが、磯間岩陰遺跡例は突帯に直交して断面V字形の溝を刻み、左右二対のC字形文様区画を配する点において松崎遺跡例と異なる。他に突帯と半円形文様区画の系譜関係を示唆する資料として、千葉県長州塚古墳（高柳銚子塚古墳）の滑石製模造品大型刀子（図9-4）がある。長州塚古墳の刀子は、柄頭端面に突帯を具備し、背側に1区画の半円形文様区画鞘を線刻する。石製模造品刀子としては、鞘に綴表現がある精製品で、鞘を表現した部分には整った構図の直弧文を線刻する。時期はTK73型式期前後と考えられるが（田中2002など）、前後の滑石製模造品刀子との系譜関係は明らかに希薄である（清喜1998など）。これらから、長州塚古墳の刀子は、直弧文系列の図文と関係が深い鹿角製刀子を比較的忠実に模造した所産であること、翻って松崎遺跡の鹿角製柄の図文は、直弧文との系譜関係を無視できないこともとされる。

連続三角文を浮彫した刀子柄の類例としては、南知多町神明社貝塚の鹿角製柄2点（図9-

1）がある。神明社貝塚例は柄間の外周面を、多直線刻み目文により区画し、その区画内に連続三角文を浮彫する。三角形の連接方法も松崎遺跡例に同じくする。さらに鹿角製ではないが、三重県六大A遺跡の木製刀子柄（図9-3、「軸棒形木製品」として報告）に類品がある。六大A遺跡例は柄頭の外周面に連続三角文を浮彫し、朱彩する。連続三角文の浮彫と朱彩の対応は、松崎遺跡例に等しく、両者には特殊な視覚効果への期待が込められていたと考えられる。

（3）意義

松崎遺跡の鹿角製柄は、第一類と第二類の鹿角製刀剣装具の系譜をそれぞれに受けた存在であるとした。その図文は、鹿角製刀剣装具に配される直弧文系統の図文であることを確認し、鹿角製刀剣装具と装飾古墳の図文が、相律的に構図を保持しながら展開した可能性を示唆した。このとき、三重県おじよか古墳の横穴式石室と有明海沿岸地域の横穴式石室に強い親縁関係が認められること（土生田1980・柳沢1991など）、松崎遺跡において天草式製塩土器（近藤1974）に類似する製塩土器が出土していることは、5世紀から6世紀における伊勢湾沿岸地域と有明海沿岸地域の交流の本質につ

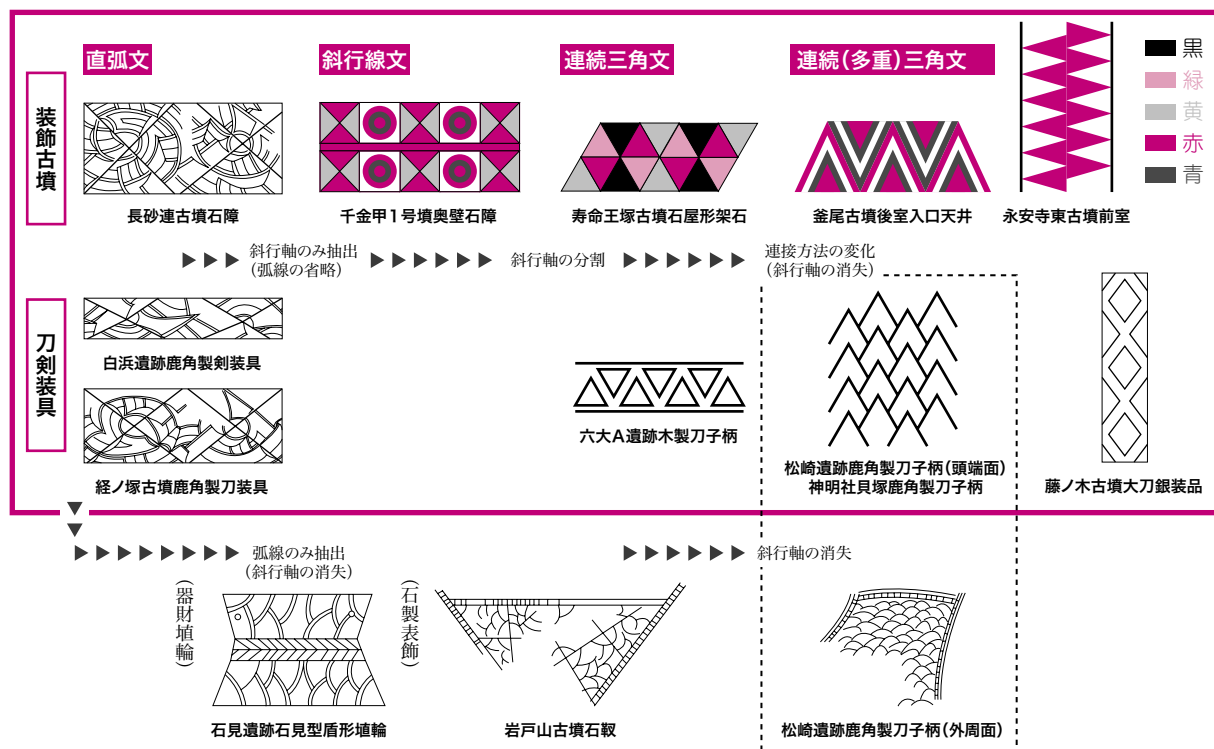


図8 連続三角文の系譜（各器物の部分を出して模式化）

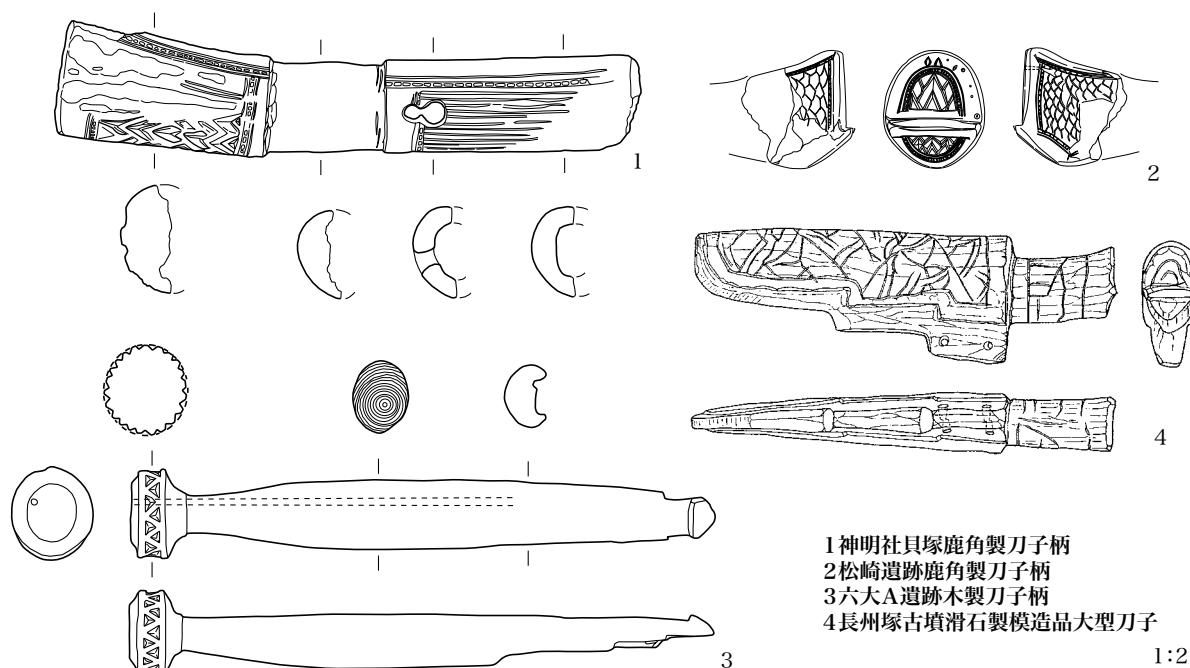


図9 鹿角製刀子柄とその関連資料

(1 は山下編 1989 より作成、3 は穂積編 2000 より作成、4 は白井他 1992 より)

いて改めて検討する必要性を生じせしめよう。

柄装具の製作時期は、鹿角製刀剣装具が使用される5世紀から6世紀に求められる。より詳細には、第二類鹿角装具の使用が5世紀後葉から6世紀前半に多いこと（福岡県寿命王塚古墳、滋賀県鴨稲荷山古墳、茨城県三味塚古墳など）、斜行軸を消失した連続多重三角文が6世紀前半の釜尾古墳などに使用されていることなどから、6世紀前半がより妥当であると判断される。それは、図文に浮彫と線刻が混在すること、遺跡から出土する鉄製刀子が両関化していることによって補強され、類例を出土した神明社貝塚や六大A遺跡が示す時期に矛盾しない。

加えて問題となるのは、鹿角製柄の製作環境である。松崎遺跡では鹿角素材や、加工段階の鹿角製品が出土することから、遺跡近辺で鹿角製品を製作していたことは疑いない。鹿角製柄の製作のみを例外とするのが穏当でないとするならば、直弧文系列の構図とその意味を理解した製作者の存在も同時に認めなければならない。直弧文を配した第一類鞘口装具が出土した三重県白浜遺跡についても、骨角製品を製作していたことが知られるので、直弧文系列の図文の地域的な展開と、その構図を保持する遺跡や集団の性格を改めて問う必要がある。

4 松崎遺跡の歴史的意義

(1) 計画村落としての松崎遺跡

松崎遺跡が本格的な集落として成立する時期は、原則的には同一の遺跡である上浜田遺跡や下浜田遺跡を含めて、5世紀後半（城山2号窯期～東山11号窯期）に求められる。上浜田遺跡における4世紀後半の遺構と遺物を加味したとしても、集落遺跡の内容は本質的に異なることは自明である。なお、近年新たに付与された重要な知見を加味すると、集落の成立には、知多式製塩土器に帰結する原初的な形態（知多式0類）の製塩土器が対応する。つまり、集落としての成立当初より、遺跡は製塩遺跡としての性格が与えられていたのである。遺跡周辺が、臨海にあって、製塩土器に必要な粘土や薪を供給する丘陵が至近にある地理的・地質的要因が土器製塩の好適地として選択されたことは改めて述べるまでもない。

このとき、先に触れた法海寺遺跡との関係は見逃せない。法海寺遺跡は松崎遺跡が集落として成立する直前段階の東山111号窯期に活発化し、渡来系集団をとまう生産技術が移植された可能性を示唆するに及んだ。松崎遺跡の

成立に呼応して法海寺遺跡の集落活動は逆に低調となること、法海寺遺跡では土器製塩が行われた形跡がないことを加味すると、塩生産に対する重要度の認識が高揚することにもなっており、法海寺遺跡から松崎遺跡に集落が移動した仮説が提示できるであろう。

この流れは決して集落構成員の自発的意思に沿うものではなく、一定の政治的意思による計画的な開発志向が作用していたことを思わせる。この意味において、松崎遺跡は法海寺遺跡からの流れを含めて、計画村落（直木 1968）として成立、展開したと理解される。計画村落の実例に渡来系集団の関与がしばしば想定されること（山尾 1979）は、法海寺遺跡の韓式系土器に意義を付すものとして興味深い。このときU字形鋤鋤先の保有に関係して、石母田正が、「在地首長層」が鉄製農工具を「独占的所有」し、「計画村落」の開発を実行したとする考え（石母田 1971）が想起されるが、U字形鋤鋤先の評価の一端については先に触れた。後述する屯倉設置の前提として、計画村落としての遺跡の成立を構想するものである。

（2）西庄遺跡と松崎遺跡

松崎遺跡の歴史的位置の理解に寄与する重要な遺跡がある。紀伊水道に面した砂州上に立地する和歌山県西庄遺跡である。

西庄遺跡は、石敷製塩炉による土器製塩を営んだ製塩遺跡で、遺跡から出土する遺物は丸底Ⅰ～Ⅱ式の製塩土器が多くを占めるが、他の生産活動や社会生活に関係する遺物の出土も多い（図 10）。以下、松崎遺跡における遺物相の類型と対比しつつそれらを列挙すると、農具として曲刃鎌、工具として鉄製刀子（鹿角装具）、漁具には網具として土錘（管状土錘・瀬戸内型土錘）、釣具として鉄製・鹿角製釣針、鹿角製疑似餌、刺突具として鹿角製・鉄製ヤス、陷穽具として須恵質飯蛸壺、武器（武具・馬具）として大刀、鉄剣（鹿角装具）、鉄鏃、鉄製鉸具、祭祀具として滑石製模造品（有孔円板、剣、勾玉、白玉、子持勾玉）、装身具として金環、碧玉製管玉、紡織具として土製・石製・鉄製紡錘車、さらに生産に関連する遺物として鞆羽口、砥石、鉄鋌、加工段階の鹿角製品、鹿角素材がある。

松崎遺跡と西庄遺跡の遺跡間にある遺物の出

土傾向や出土量の多寡は、遺跡における生業の比重や時代的な傾向に左右されるものとして、遺物の類型に顕著な相関関係が認められることは明らかである（図 11）。特に鹿角製刀剣装具第一類に系譜する鹿角製刀子柄（図 10-5、6）や柄に直弧文系統の図文を線刻した刀子柄（図 10-4）の存在は、それを保持する集団の性格が類似することを強く示唆する。本来は剣装具であった第一類鹿角装具の刀子柄への応用は、松崎遺跡の刀子柄にみる所作におよそ一致することも留意される。一方、別の刀子柄側面に残る直弧文は本来の構図を失っている。

西庄遺跡は、庄内～布留式期にかけての一般的な集落から、突如として5世紀に大規模な製塩遺跡に変貌する。その過程において、紀ノ川河口域の遺跡に集中する韓式系土器が西庄遺跡に多数もたらされている事実は、集落の開発と渡来集団の配置が一定の政治的意思に沿うものであったことの反映であったと考えられる。西庄遺跡にみる開発の志向、すなわち計画村落として集落が成立する過程は松崎遺跡と脈絡を同じくする。

（3）「海部」、 「屯倉」と松崎遺跡

ところで、天平 19 年の『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（『寧楽遺文中巻』）は、紀伊国海部郡木本郷の墾田の施入を伝えている。井上辰雄によると、紀伊国海部郡は欽明 17（556）年に設置された「海部屯倉」に由来するという（井上 1967）。そして、その海部屯倉は木本にあって、木本郷の中心的集落である西庄遺跡が海部屯倉に関係した遺跡であるとも森浩一らが早くに提起した（森・白石 1968）。海部と塩生産の関係の深さはつとに指摘されるところであって（井上 1967、渡辺・近藤 1970）、西庄遺跡における塩生産と海産物生産は、海部屯倉における生産の具体的内容の反映と解釈することも不可能ではない。

その紀伊国海部屯倉の設置には蘇我氏が関与したことが伝えられている。蘇我氏は同年の吉備児島屯倉の設置に関与したことからも、畿内周辺の塩生産地に対する支配に積極的に関与したようである。児島屯倉も海部を屯倉とし、伴造として吉備海部を統領していたのが吉備海部直一族で、その本拠地は児島郡にあったとされ

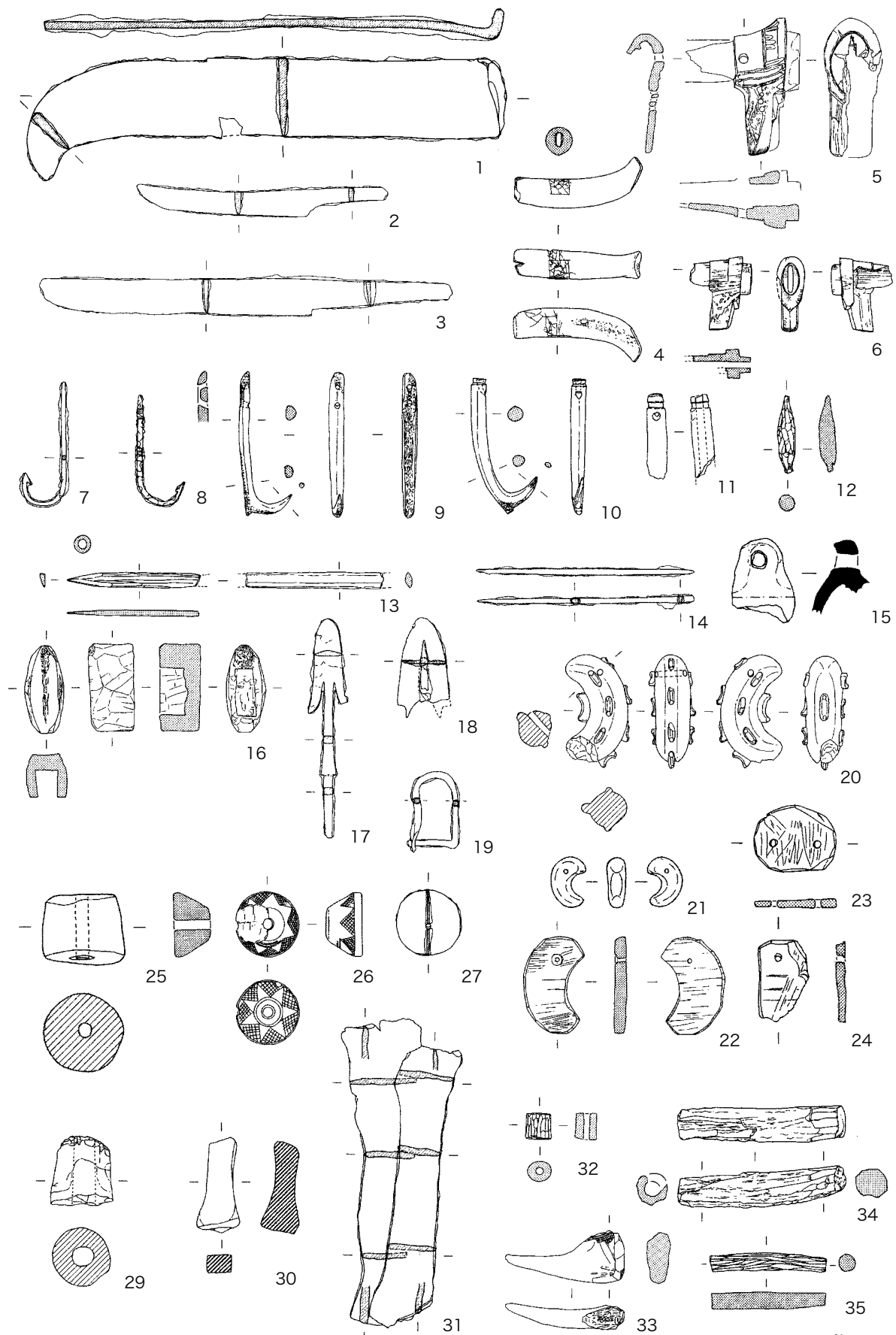


図 10 西庄遺跡の遺物（富加見編 2003 より）

21～24は1:2、その他は1:4

る。その児島屯倉に関係すると推定されている遺跡が香川県喜兵衛島遺跡（古墳群）である。なお、蘇我稲目の娘、「堅塩媛」の名は、蘇我氏の塩に対する関心の高さを推測させるという（勝浦 1992）。

さて、平城宮木簡には「大塩尻」を貢納した「知多郡御宅里」がみえ（『平城宮木簡三』2896号）、尾張国知多郡に塩の収取を目的としてミヤケが設置されたことが類推される。「御宅里」の比定地は不明とせざるをえないが、知多式製塩土器による塩生産を継続的かつ大規模に展開した松崎遺跡周辺が、「御宅里」、すなわちミヤケの有力な候補地の一つであることは疑えない。

このとき注目されるのが、松崎遺跡における装飾付大刀の存在である。装飾付大刀は貴金具が知られるのみであるが、6世紀後半～末（TK43型式期）の年代が与えられ、古式の双龍環頭大刀などにともなう公算がある。装飾付大刀の分与に深く関与した氏族の対比は論者によって異なるが、6世紀後半～7世紀前半に盛行する双龍環頭大刀については蘇我氏の関与を認めることでおおよその見解が一致し（清水 1983、穴沢・馬目 1986、新納 2001）、同時期の所産である松崎遺跡の装飾付大刀についても、蘇我氏がその分与に関与したことは否定で

きない（註5）。つまり、蘇我氏が松崎遺跡の装飾付大刀の分与に関与したとする仮説には、蘇我氏による屯倉設置記事の年次と装飾付大刀の年代が近接することを踏まえると、尾張国知多郡へのミヤケ設置が、紀伊国海部屯倉らの設置と同時代的に進行したという歴史的背景を重ねることも可能となる（註6）。

新納泉は、双龍環頭大刀の集中分布が日本海ブロックと東海ブロックの形成を示すことを論じ、その背景に東海や東国の農業生産力の向上を想定した（新納 2001）。しかし、農耕適地に対する言及は特になく、「日本海・東海ブロックの結びつきを示す資料」として「尾張型埴輪」を例示するにとどまった。この現象に対する解釈としては、狩野久が藤原・平城宮木簡に記された若狭国の氏姓に「三家人」が多く認められる事実から、若狭に塩の収取を目的としたミヤケの設置を推察したこと（狩野 1970）に従えば、むしろ蘇我氏による日本海地域、東海地域への装飾付大刀の分与は、塩生産地の掌握をも目的としたと理解する余地も生じよう（註7）。

まとめ

土器製塩の実体分析から離れ、松崎遺跡の多くの側面を思いつくままに話題とした。それらを包括的に改めて叙述することで、本文のまとめとしたい。

5世紀後半に松崎遺跡が臨海に成立する契機として、計画村落としての開発志向を構想し、生産技術を携えた渡来系集団とそれを差配した有力氏族の介在を想定した。この構図は、屯倉設置への流れの前提であったと理解した。遺跡は、塩生産のみを生業の専らとしたのではなく、海産物生産の一定の比重も見込まれ、6世紀には武装集団として編成された公算をも認めた。それら軍事活動を含めた生産活動に必要とされる農工漁具や武器の保有は、集落内における鉄器や骨角器の生産加工技術による裏打ちが

製塩遺跡における遺物相の比較		松崎遺跡	西庄遺跡
農具(土木具)		U字形鉄鋤先	曲刃鎌
工具		鉄製刀子 (付.鹿角製刀子柄)	鉄製刀子 (付.鹿角製刀子柄)
漁具	<網具>	管状土鍾(付.網針)	管状・瀬戸内型土鍾
	<釣具>	鉄製釣針	鉄製・鹿角製釣針
	<刺突具> <陥穿具>	土師質飯蛸壺	鹿角製疑似餌 鉄製蛸 鹿角製ヤス 須恵質飯蛸壺
武器(銃・騎)	(武具)	鉄剣 装飾付大刀(金銅製)	大刀 鉄剣 (付.鹿角製刀剣装具)
	(馬具)	鉄鏃 鉄製鉸具	鉄鏃 鉄製鉸具
祭祀具	滑石製模造品	勾玉 有孔円板	勾玉 子持勾玉 有孔円板 剣 白玉
装身具		碧玉製管玉	碧玉製管玉 金環
紡織具		陶製・鉄製紡錘車	土製・石製・鉄製紡錘車
(その他)	生産用具製作関連	輪羽口 砥石 鉄滓 鹿角素材・未製品	輪羽口 砥石 鉄滓 鹿角素材・未製品

図 11 松崎遺跡と西庄遺跡における遺物相の比較

（註5）装飾付大刀の分与に特定氏族が深く関与したという仮説には一定の配慮が必要とされるが、錯綜する地域間関係、あるいは人格関係を単純化することなく、地域の史的脈絡において把握する場合には、一定の有効な解釈が実現されるものとする。

（註6）ミヤケを通じた経済部門における尾張国と蘇我氏との関係は、宣化元年紀の那津官家修造記事にもみることができる。

（註7）無論のこと、これら屯倉の設置は単純に塩の収取や専売のみを目的としたのではなく、塩の対価価値による財政的側面、港湾拠点の掌握による海運・軍事的側面も重視されたことが予測できる。装飾付大刀は後者の側面に直結し、松崎遺跡における武装内容との関係も興味深い。いずれの側面が重要であったかを論じることは本質ではない。装飾付大刀の分与の意味は、軍事力を背景とした経済、人身の掌握を包摂したものであることをより意識する必要があるように思われる。

あった。松崎遺跡には多角的な生産活動が求められ、至ってそれは政治戦略的な性格を帯びていた。

以上に挙げた集落の成立契機や内部構造は、「海部」、「屯倉」に関係する遺跡に共通する側面が多い。加えて、集団の帰属、出自、格式を明示する鹿角装具の保持から、集団の性格やその編成をも同じくしたことが考えられる。それらから推される地域間の交流関係には、海洋を通じた独自の人格関係といった性格をも積極的に加味する必要がある。装飾付大刀については、それを保持する伴造と、伴造によって統領される品部集団の存在が思い描かれる。史料が伝える屯倉（特に後期型屯倉）設置の動き（平野 1985）と装飾付大刀が示す年代から、6 世紀後半には中央に直結する有力氏族の関与によって、製塩集団の組織化が企図されたのであろう。結果として、松崎遺跡は平城宮木簡にみる「三宅里」、すなわちミヤケに関係する遺跡の有力な候補とした。具体的な史料を欠くが、海部としての製塩集団の編成も想像される。

7 世紀には知多式 3 類が知多半島や三河湾沿岸地域において普遍化し、塩生産の規模が拡大する。この現象は、調庸塩貢納国としての尾張国や庸塩貢納国としての三河国に対して規格の統一と塩の増産が求められたことの反映であろう。上の流れに応じて、松崎遺跡をはじめとす

る製塩遺跡はより専門の度を強めたに相違ない。それは、前代までの屯倉制・部民制を基礎とする領域・人身的な生産体制とは本質的に異なった貢納経済を前提とする生産体制への移行を意味していた。

以上、松崎遺跡を例として、集落の機能や構造を規定する集落立地に政治権力が交差する構図を提示した。計画村落（「計画的設定村落」）が規則的な集住形態を示す傾向にあるという集落地理学における指摘（矢嶋 1956）をも踏まえるなら、古墳時代には新たな地域開発の動きに応じて、集落景観や集団編成が質的な変化を経験したことは容易に察しがつく。同時に周辺集落の再編も進行したであろう。古墳時代の集落、あるいは村落を論じるうえでは、集落立地のみを問題とするのではなく、また、集団の分節化のみを殊更とするのではなく、多くの概念を準備し、丹念に参照する姿勢が必要である。ここに示した方向性が本稿のささやかな結論である。

本稿の一部は、平成 15 年度に実施した愛知県史編さん事業にともなう資料調査の成果である。資料調査においては、立松彰、永井伸明、瀬川貴文、高橋信明、伊藤久仁洋、森崇史、鬼頭剛、堀木真美子、東海市教育委員会、名古屋市博物館、愛知県埋蔵文化財調査センター、知多市歴史民俗博物館、南知多町教育委員会、愛知県史編さん室、愛知県埋蔵文化財センター科学分析室の諸氏、諸機関による格別なるご高配があった。末筆ながら記して謝す。

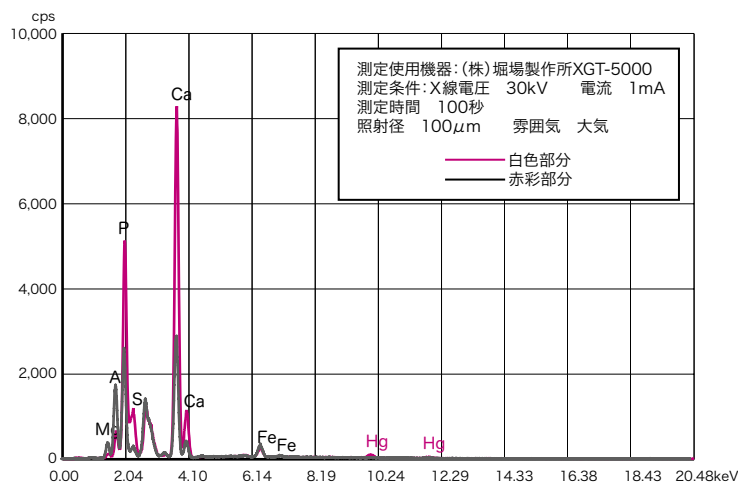


図 12 鹿角製刀子柄赤色顔料の蛍光 X 線スペクトル図

参考文献

- 穴沢咏光・馬目順一 1986 「日本における龍鳳環頭大刀の製作と配布——一つの試論——」『月刊考古学ジャーナル』No.266 ニュー・サイエンス社
- 石部正志 1985 「原始・古代の土器製塩」『講座・日本技術の社会史 第2巻 塩業・漁業』日本評論社
- 石母田正 1971 『日本の古代国家』岩波書店
- 井上辰雄 1967 「古代製塩の生産形態——肥公五百磨を中心として——」『正税帳の研究』塙書房
- 岩崎卓也 1985 「鉄製鋤・鋤先の周辺」『日本史の黎明』六興出版
- 岩本正二・大久保徹也 1999 「喜兵衛島以降の土器製塩研究の展開」『喜兵衛島——師楽式土器製塩遺跡群の研究——』『喜兵衛島』刊行会
- 魚津知克 2000 「鉄製農具副葬についての試論」『表象としての鉄器副葬』鉄器文化研究会
- 大村直 1996 「鉄製農具の組成比」『史館』第28号 史館同人
- 大谷晃二 1999 「上塩治築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩治築山古墳の研究』島根県古代文化センター調査研究報告書4 島根県古代文化センター
- 勝浦令子 1992 「古代の塩支配と地域経済」『新版古代の日本 第4巻 中国・四国』角川書店
- 勝部明生・鈴木勉 1998 『古代の技 藤ノ木古墳の馬具は語る』吉川弘文館
- 狩野久 1970 「御食国と膳氏——志摩と若狭——」『古代の日本 第5巻 近畿』角川書店
- 小林行雄 1976 a 「直弧文」『古墳文化論考』平凡社
- 小林行雄 1976 b 「鹿角製刀剣装具」『古墳文化論考』平凡社
- 近藤義郎 1965 「知多・渥美地方における製塩土器の研究」『日本塩業の研究8』日本塩業研究会
- 近藤義郎 1966 「製塩」『日本の考古学V 古墳時代（下）』河出書房
- 近藤義郎 1974 「天草式製塩土器」『日本塩業の研究』第15集 日本塩業研究会
- 清水みき 1983 「湯舟坂2号墳出土環頭大刀の文献的考察」『湯舟坂2号墳』京都府久美浜町文化財調査報告第7集 久美浜町教育委員会
- 白石太一郎 1999 「装飾古墳にみる他界観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館
- 杉崎章 1956 「知多半島における古代漁村集落の土器」『古代学研究』15, 16 合併号
- 清喜裕二 1998 「初期農具形石製模造品の基礎的研究——大形石製刀子を中心として——」『古代』第105号 早稲田大学考古学会
- 高木正文 1999 「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第80集 国立歴史民俗博物館
- 高橋一夫 1971 「石製模造品出土の住居址とその性格」『考古学研究』第18巻第3号
- 田中新史 2002 「伝常陸浮島出土の滑石製模造品」『土筆』第7号 土筆舎
- 立松彰 1984 「知多地方における製塩土器の編年」『知多古文化研究会』I 知多古文化研究会
- 立松彰 1994 「愛知県」『日本土器製塩研究』青木書店
- 直木孝次郎 1968 「古代国家と村落——計画村落の視点から——」『奈良時代史の諸問題』塙書房
- 新納泉 2001 「空間分析からみた古墳時代社会の地域構造」『考古学研究』第48巻第3号
- 西口陽一 1989 「大阪・イイダコ壺」『考古学研究』第36巻第1号
- 土生田純之 1980 「突起をもつ横穴式石室の系譜——本州における事例の検討——」『考古学雑誌』第66巻第3号
- 早野浩二 2004 「濃尾の韓式系土器」『かにかくに』八賀晋先生古稀記念論文集刊行会
- 早野浩二 2005 「祭祀遺物」『愛知県史 資料編3 考古3 古墳』愛知県
- 平野邦雄 1985 『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館
- 広瀬和雄 2003 「住居と集落」『古墳時代の日本列島』青木書店
- 福岡晃彦 1991 「知多式製塩土器4類」『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第20集（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 堀本真美子 1998 「松崎遺跡出土の人骨について」『年報』平成9年度（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 松村恵司 1991 「古代村落と鉄器所有」『日本村落史講座 第4巻 政治I 原始・古代・中世』雄山閣出版
- 森浩一 1950 「大阪湾岸の飯蛸壺形土器とその遺跡」『古代学研究』2号
- 森浩一 1963 「飯蛸壺形土器と須恵器生産の問題」『近畿古文化論攷』榎原考古学研究所
- 森浩一 1992 「海人文化の舞台」『海と列島文化 第8巻 伊勢と熊野の海』小学館
- 森浩一・白石太一郎 1968 「紀淡海峡地帯における古代漁業遺跡調査報告」『紀淡・鳴門海峡地帯における考古学調査報告』同志社大学文学部考古学調査報告第2冊
- 森勇一 1989 「松崎貝塚の古代製塩について」『埋蔵文化財愛知』No.17（財）愛知県埋蔵文化財センター
- 森勇一 1991 a 「珪藻分析によって得られた古代製塩についての一考察」『考古学雑誌』第76巻第3号

森勇一 1991 b 「松崎遺跡における古代製塩法について」『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 20 集 (財) 愛知県埋蔵文化財センター

矢嶋仁吉 1956 『集落地理学』古今書院

柳沢一男 1991 「若狭の横穴式石室の源流を探る」『躍動する若狭の王者たち—前方後円墳の時代—』福井県立若狭歴史民俗資料館

山尾幸久 1979 「県の史料について」『論究日本古代史』日本史論叢会 学生社

脇田晴子 1995 「歴史学からみた手工業生産」『常滑焼と中世社会』小学館

渡辺則文・近藤義郎 1970 「海部と製塩」『古代の日本 第4巻 中国・四国』角川書店

渡辺誠 1991 「松崎遺跡におけるブロック・サンプリングの調査報告」『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 20 集 (財) 愛知県埋蔵文化財センター

渡辺誠 2000 「鉄製釣針の研究」『考古資料ソフテックス写真集』名古屋大学文学部考古学研究室

遺跡文献目録

磯間岩陰遺跡；小林行雄 1976 「鹿角製刀剣装具」『古墳文化論考』平凡社／堅田直 1993 『古墳』光文社

岩戸山古墳；小林行雄編 1968 『世界考古学体系』Ⅲ 平凡社／森貞次郎 1970 『岩戸山古墳』中央公論美術出版

石見遺跡；末永雅雄 1935 「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』第 13 冊 奈良県

瓜郷遺跡；久永春男他 1963 『瓜郷』豊橋市教育委員会

永安寺東古墳；田辺哲夫 1984 「永安寺東古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会

おじょか古墳；小玉道明・下村登良男・村上喜雄 1968 『志摩・おじょか古墳発掘調査概要』阿児町教育委員会

釜尾古墳；乙益重隆 1984 「釜尾古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会

上浜田遺跡；立松彰・永井伸明 1999 『上浜田遺跡発掘調査報告』東海市教育委員会

鴨稲荷山古墳；森下章司他 1995 「鴨稲荷山古墳出土遺物の調査」『琵琶湖周辺の 6 世紀を探る』京都大学文学部考古学研究室

経ノ塚古墳；1924 長谷部言人「陸前名取郡経の塚出土鹿角製刀装具に就て」『人類学雑誌』第 39 巻第 4 号第 5 号第 6 号／伊藤玄三 1984 『直弧文』考古学ライブラリー 28 ニュー・サイエンス社

喜兵衛島遺跡・古墳群；近藤義郎編 1999 『喜兵衛島—師楽式土器製塩遺跡群の研究—』『喜兵衛島』刊行会

三味塚古墳；後藤守一・斎藤忠・大塚初重・川上博義 1960 『三味塚』／斎藤忠「三味塚古墳」『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』茨城県

下内橋遺跡；渡辺誠・桐山秀穂編 1996 『下内橋遺跡』知多市文化財資料第 33 集 知多市教育委員会

三味線塚古墳；三田敦司編 2001 『三味線塚古墳』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 18 集 豊田市教育委員会

白浜遺跡；伊藤玄三 1968 「志摩半島御座の鹿角装刀」『古代学研究』52 号／萩本勝編 1990 『白浜遺跡発掘調査報告』本浦遺跡群調査委員会

寿命王塚古墳；柳沢一男 2004 『描かれた黄泉の世界 王塚古墳』新泉社

神明遺跡；森泰通編 1996 『神明遺跡』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 6 集 豊田市教育委員会／森泰通編 2001 『神明遺跡Ⅱ』豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第 17 集 豊田市教育委員会

神明社貝塚；山下勝年編 1989 『神明社貝塚』南知多町文化財調査報告書第 8 集 南知多町教育委員会

千金甲 1 号墳；三島格 1984 「千金甲 1 号古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会

長州塚古墳；森本六爾 1925 「直弧文を有する石製刀子」『古代文化研究』2／白井久美子他 1992 『古墳時代(2)』房総考古学ライブラリー 6 (財) 千葉県文化財センター

長砂連古墳；小林行雄 1976 「直弧文」『古墳文化論考』平凡社／乙益重隆・三島格・下林繁夫 1984 「長砂連古墳」『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第 68 集 熊本県教育委員会

西庄遺跡；富加見泰彦編 2003 『西庄遺跡』(財) 和歌山県文化財センター

藤ノ木古墳；前園実知雄編 1993 『斑鳩藤ノ木古墳第二・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所

法海寺遺跡；渡辺誠編 1993 『法海寺遺跡Ⅱ』知多市文化財資料第 31 集

松崎遺跡；杉崎章 1956 「知多半島における古代漁村集落の土器」『古代学研究』15, 16 合併号／杉崎章編 1977 『松崎貝塚』東海市教育委員会／

杉崎章編 1984 『松崎貝塚第 2 次発掘調査報告書』東海市教育委員会／福岡彦彦編 1991 『松崎遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 20 集 (財) 愛知県埋蔵文化財センター

六大 A 遺跡；穂積裕昌編 2000 『六大 A 遺跡発掘調査報告(木製品編)』三重県埋蔵文化財調査報告 115-17 三重県埋蔵文化財センター